

公開講演会「ワシントン・スミソニアン機構」アーカイブズ・オブ・アメリカンアート(AAA)のすべて」報告
AAAコレクションの多様性・高エビデンス性とアクセス可能性をめぐる

水谷長志

本年八月十八日、東京国立近代美術館講堂において、AAA(Archives of American Art)の副所長リザ・キルウィン博士(Dr. Liza Kirwin, Deputy Director)と情報資源部長カレン・B.ヴァイス氏(Karen B. Weiss, Head of Digital Operations)による標記の公開講演会を開催した[図1・註1]。

近年、日本においてもアート・アーカイブ



図1 左より通訳の枝村氏、講師のキルウィン博士、ヴァイス氏

ブ、特に近現代美術のアーカイブについて極めて広く高い関心が寄せられ、今年に入ってから例えば「具体」もの派のシンポジウムが続けて開かれ、現代美術館の研究紀要においてもアーカイブが特集に組み込まれたりしている[註2]。背景には、インターネットとデジタル・アーカイブの隆盛、並行して進む現代美術におけるアーカイバル・アート(Archival Art)への志向の高まりがあるとも指摘されている[註3]。

当館においては本誌『現代の眼』が、二〇〇〇年にデジタル・

アーカイブの萌芽的タイミングで、「デジタル化以前」のアート・アーカイブを特集したことがあるし、所藏品目録の英語標題に「Archives」を採用した初発の館でもあり、継続的に関心を寄せてきた[註4]。本誌『現代の眼』(五二三号)の特集においては、「アート・アーカイブ(art archives)」を作品と公刊、活字化された図書・文獻との(あわい)にあるものと定義し、東京文化財研究所(田中淳氏)、松戸市美術館準備室(森仁史氏)、萬鉄五郎記念美術館(平澤広氏)、国吉康雄美術館(小澤洋子氏)、神奈川近代文学館(藤木尚子氏)による事

例で特集を組んだ。小澤氏の寄稿は、「国吉康雄アーカイブスの形成とAAAのこ」と題するものであり、AAAの紹介としては、本誌はもとより、他の媒体においても類例のない文獻として、あらためて紹介しておきたい。

二〇〇〇年以降、アート・アーカイブは、その関心の高まりが顕著でありながら、また国策としての構築の必要が指摘されながら、なぜかスミソニアン機構の一翼という、いわば国家規模のアート・アーカイブであるAAAという優れたモデルは看過されてきた。AAAについて当事者から

まとまりのあるアーカイブ数: 5,930
資料を架蔵した場合の総延長: 16,215ft (約5,000m)
オーラル・ヒストリーのインタビュー数: 2,280
オンラインでの資料探索案内(finding aids online): 696種
オンラインでの提供可能なデジタル・ファイル数: 1,941,485

表1 AAAの主な資料概数

A: Autobiography「自伝」
B: Biography「伝記」
C: Contacts「つながり」
D: Diaries「日記」
E: Eulogies「追悼文」
F: Financial Record「財務記録」
G: Grant Application「助成金申請書」
H: Handwriting「手稿」
I: Illustrated Letters「絵手紙」
J: Journal「省察録」
K: Keepsake「形見の品」
L: List「一覧表」
M: Memoir「回顧録」
N: Notebook「ノート」
O: Oral History「オーラル・ヒストリー」
P: Photography「写真」
Q: Questionnaire「質問票」
R: Reviews「評論」
S: Statements「声明文」
T: Tax Records「納税記録」
U: Unidentified「未確認資料」
V: Verso「裏面」
W: Works of Art「芸術作品」
X: Xerography「ゼログラフイー」
Y: Yearbook「卒業アルバム」
Z: Zine「ジーン」

表2 Archives of American Art: From A to Z



図2 ロバート・スミソンのK: Keepsake (形見の品)
「瓶に入れられたこの蛇の頭を我々ほどのように理解すればよいのでしょうか? このスミソンの「バラのつぼみ」は、映画「市民ケーン」に登場する「バラのつぼみ」と呼ばれたあのソリのように、彼の生涯の業績からは見えてこない主人公[スミソン]の本当の姿について明らかにしてくれるものなのでしょうか?」
Dr. Kirwin's Slide #13

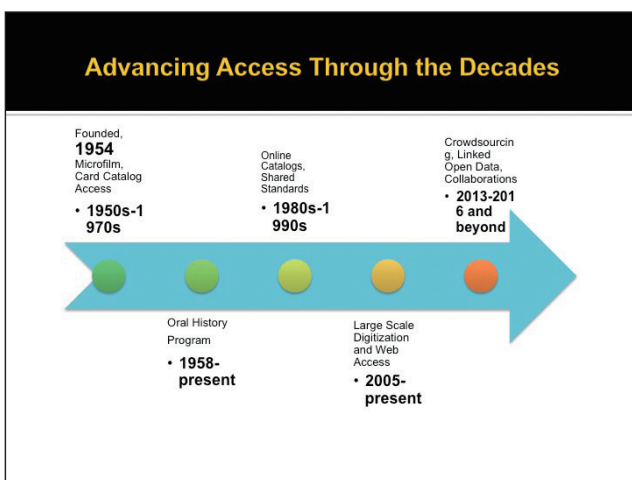


図3 Advancing Access Through the Decades : コレクション・アクセスの開発の経年的遷移
Ms. Weiss's Slide #2

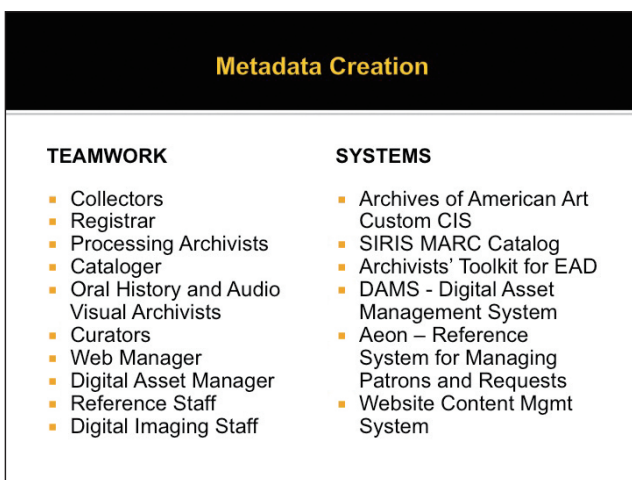


図4 Metadata Creation : AAAの「人(左)」と「システム(右)」
Ms. Weiss's Slide #32

の報告をもとに具体的に知見し、理解される機会がほぼ皆無であった。それ故に、この度、科学研究費補助金を得て、またとない講師をお呼びできたこと、そして多くの関心のある方々のご参加を得られたことに、主催者としてあらためてお礼申し上げます。

副所長のキルウィン博士は、「AAAのAからZまで—— Archives of American Art: From A to Z」と題し、AAAの持つアーカイブ・コレクションの概要「表1」を、特にその多様性と高いエビデンス性に裏打ちされた資料が発揮する有効・有用性(美術研究のみならず氏の専門からす

れば「アメリカン・スタディーズ」への寄与も)について、アルファベット二十六文字に即して、よく用意された美しい図版と説得力のあるコメントでプレゼンテーションされた「表2」。図2はロバート・スミソン(Robert Smithson, 1938 - 1973)のK: Keepsake (形見の品)、「瓶入りの蛇の頭の標本」の例であるが、博士は、「過去二十一年で、スミソンの芸術とそれを超す大量の彼の文書は、一つの美術史の領域を生み出しました。膨大な量の論文、書籍、アンソロジー、シンポジウム、その他の著作はもちろん、ロバート・スミソンの名がタイトルに含まれた博士論文も十一

本あります。実際、スミソンについて研究をしていて、ワシントンDCにある我々の手稿閲覧室を利用しないという人はほとんどいません」と述べて、自らのコレクションの高い有用性についての自信を披露して、他のスライドとともに、出席の聴衆に深い感銘を与えた。

ヴァイス氏は、一九五四年のデトロイトに始まるAAAの設立から説き起こして、コレクション管理システムと保存媒体の変遷、とりわけクレス財団からの寄附金による大規模デジタル化の実際をダイナミックに話を展開した「図3」。注目すべきスライドは図4であり、すなわちこのスライド

が示しているのは、人的なプロフェッショナルリテリに裏付けられた分業とタスクの複数性であり(左列: TEAMWORK)、重層的なサブシステムの連携によるAAAの独自システムの構築のあり様と資料体へのアクセスの可能性とその保証(右列: SYSTEMS)について説明した。そこにはスミソニアン機構が多数の機関の複合体であり、AAAもその一員であって、機構全体の情報システムであるSIRIS「註5」との関係が不即不離であることが理解された。

以上は二講演の概略であるが、東京国立近代美術館の本講演会のサイトには両講師の全スライド、講演原稿(原文

および枝村泰典氏による訳文)をすべてPDFで掲載している【註6】。講演とは別に、筆者からの問い合わせにに応じて下さった「AAAにおける「著作権処理(copyright handling and agreements)」と「個人情報の開示 (disclosure of artists' personal information)」について」も掲載し、末尾には「寄贈証書(Deed of Gift)」の実例を付している。是非参照されたい。

今回の講演会はAAAの活動と組織実体について、ようやく日本にも現場の実務者から紹介された初めての好機となった。一層の情報を希望される方は、一九六〇年に創刊されたAAAの機関誌(Bulletin: 誌名変更あり)が今日も継続しており、東京国立近代美術館アートライブラリは全巻を所蔵し、JSTORにも掲載があるので【註7】、是非、これからアート・アーキビストを目指す有意のライブラリアン、アーキビスト、研究者には、この資料の閲覧を強く勧めたい。

最後に講演会後、ワシントンからいただいたヴァイス氏のメールの末尾に書かれたメッセージを紹介したい。

I welcome any questions or requests for information, as well as thinking about the possibility of an internship or training for a Japanese curator,

archivist or librarian wishing to spend time at the Archives on our collections processing, oral history program or digitization activities.

今後、日本におけるアート・アーカイブの形成の本格的な実現を目指すならば、予算、空間、フアシリティと同等以上に、実務専門家をこのような優れたモデルであるAAAに長期研修生として派遣するなど、人材の育成が最も急務であり、必要であることは、今回の講演会参加者が一様に、共通して抱いた感想であること、を、あらためて確認して、ここに記録しておきたい。(企画課主任研究員)

註

1 本講演会は、「科学研究費補助金(基盤研究(B))：課題番号26280125(平成二十六年二一八年年度「ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合」(代表：丸川雄三「国立民族学博物館」)の一環として開催したものである。

2 谷口英理「日本の美術館にアーカイブズは可能か? シンポジウム「日本の戦後美術資料の収集・公開・活用を考える」
http://artscap.jp/study/digital-archive/10121712_1958.html

シンポジウム「もの派とアーカイブ——海外への発信をめぐる」
<http://www.tamabi.ac.jp/sre/monoha/>

「金沢21世紀美術館研究紀要」第「アーカイブ」issue 06/2016 特集「アーカイブ」

https://www.kanazawa21.jp/data_list.php?g=52&d=7

3 右の註2の「R「アル」」06に掲載の論考「アーカイブ的芸術：混沌とした時代の作法」(山峰潤也)など。Archival Artに「このまじり合った論考としては、香川壇「想起のかたち」記憶アートの歴史意識」水声社、二〇一二年を挙げておきたい。

4 「特集：アート・アーカイブ」五二三号、二〇〇〇年八月九月号。各人の論考に現れたキーワードは、AAA、国吉のほかには、ダンボール箱、フィールドワーク、『萬鉄五郎書簡集』、特別資料。藤本論考においてのみデータベースの語が現れる。

『岸田劉生 作品と資料』の英題目が、*Ryuzi Kishida: Works and Archives*, 1996.

5 Smithsonian Institution Research Information System, <http://www.siris.si.edu/> SIRISとAAAとの関係については、齊藤歩「アーキビストは書誌情報検索システムをどう活用しているか」記述標準から考える「情報の科学と技術」六十六巻四号、二〇一六年四月号、一五三—一五九頁が参考となる。

6 <http://www.monat.go.jp/an/visit/library/aaz20160618/>

7 Moving Wall: 5years

講演会の週明けの六月二十日の月曜日、慶應義塾大学アート・センターでのワークショップにもお二人は立ち会われました。その日の最後に、キルウィン博士に昨年当館で開催の国立美術館コレクションによる展覧会「これからの美術館事典」のカタログをお贈りすると大変喜ばれました。なぜならば、この展覧会もまた美術館の「A to Z」で構成されていたからであります。

次号予告 2016年12月—2017年1月号 12月1日刊行予定

現代の眼 621

On view

endless 山田正亮の絵画

瑛九 1935—1937 闇の中で「リアル」をさがす

所蔵作品展 近代工芸と茶の湯II (仮称)

2016年10月1日発行(隔月1日発行) 現代の眼 620号

編集：独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館／美術出版社

制作：美術出版社

発行：独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館

〒102-8322 東京都千代田区北の丸公園3-1 電話 03(3214)2561

表紙：トーマス・ルフ「jpeg」《jpeg ny01》2004年

© Thomas Ruff / VG Bild-Kunst, Bonn 2016

MOMAT 支援サークル

木下グループ 三菱商事 鹿島建物 Marubeni
パシフィックコンサルタンツ JEOL 日本電子株式会社 SEIKO